

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

コープ未来の森づくり基金レポート

# モリイク

MORI - IKU

森に行こう。  
森で育とう。  
森を、育てよう。

vol.13  
Apr. 2017

## 編集後記

将来、何になりたいか。そんなことを考えていた頃の記憶はもうすっかり失せてしまいましたが、多くの人がそうであるように、私も大学を出て、一般的な企業に就職して、デスクワークをして生きていくのだろうと漠然と思っていたのだろうと思います。

その頃、森で働く、なんていうことは頭の片隅にも思い浮かびませんでした。でも、森に入り、木と向き合うことを生業とする、という生き方は、そのときにもあったわけで、もしそういった職業に触れていたら、今の自分はどうなっていたのだろう。

あの頃と違って多様な価値観や生き方に触れる機会が多くなった今、就職活動というステップにも、もっと多様性があるいいのではないかと。そしてそのひとつが、森と生きるという選択肢であることは、ととても素敵なことではないか。そんなことを思いながらこの号を編集しました。

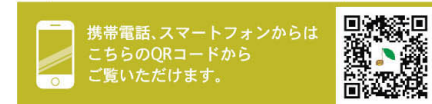


若者たちは未来を  
森から学びとる。

森に触れ、森を学ぶ。  
ちょっと違う未来が扉を開く。

あすもりfacebookページ

<https://www.facebook.com/coop.asumori>



モリイク vol.13  
2017年4月発行  
発行元/ コープ未来の森づくり基金

この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクおよび100%再生紙を使用して作成しています。



コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。





# モリイイク

人が森を育てるだけではない。  
森が人を育てるということも、  
大切な森づくりだと思う。

## \* contents \*

- コラム 森づくりのトレンド \*02  
未来のための市民による森づくり
- 特集 NPO法人 ezorock  
PROJECT NINOMIYA \*04
- 自然とつながるライフスタイル \*08  
さくらの咲くところ家具工房
- もっと樹のことを語ろう \*09  
大きな木の小さな物語
- 親子で楽しむ森のページ \*10  
森のキモイ・キレイ
- 森林再生コラム \*12  
白樺を焚きながら、春を待つ。
- コープ未来の森づくり基金報告 \*13  
どんぐりプロジェクト報告 など

## Starting Column 森づくりのトレンド

### あした 未来のための 市民による 森づくり

私たちの基金の名前は「未来の森づくり」ですし、社会一般に森林にかかわる団体を「森林づくり団体」と称しています。これは私たち人間が森林をつくり、育てていく、という森とのかかわりあいを示したものといたします。

しかし、よく考えてみると、私たちが森を育てているだけではなく、私たちが森づくりを通して「育てられている」といえるのかもしれない。

森づくりを通して、自然や森のことをよりよく知るようになり、その素晴らしさや大切さ

を感じていく、ということは皆さん経験があるのではと思います。それだけではなく、森づくりを通して仲間を広げ、また森づくりの経験を生かして新しい活動の広がり各地で進んでいます。

昨年島根県の津和野町に調査に行ってきましたが、そこでは若い人たちが移り住んで森づくりに熱心に取り組んでいました。首都圏出身の若い人が、自分の納得できる森づくりを進めたいと思い、津和野町が募集した地域おこし協力隊に応募したのが最初

のきっかけでした。彼は高齢化が進む集落に生活の拠点を置き、集落で面倒を見切れなくなった森林の手入れを始めましたが、そこに彼の学生時代の仲間や、自然の中で生活することにあこがれた人たちが集まってきました。地域の人たちにも森づくりのイロハから教わりながら技術を磨き、また、だんだんと地域に溶け込んできました。こうした中で森づくりを進めることだけでなく、森を活用して高齢化が進む地域の活性化を図ることが必要と考え、木の

活用やツーリズムまでも視野に入れて自立した活動を目指していました。

すでに多くの皆さんにおなじみの下川町では、若い人たちがバトンタッチをしながら森づくりの活動を進めてきています。下川町には20年以上前から、都市部の若い人が森林組合の作業班員として移住してきていましたが、移住した人々はNPOをつくり、森づくり活動や体験活動などを展開し始めました。現在NPOは法人化されていますが、この間森林療法や地域の子どもたち

への森林環境教育、さらには地域づくり支援や地域材の有効活用など、活動の枠を広げています。こうした活動に魅力を感じ、新たにNPOの仲間に入った若い世代の人たちが活動を継承し、発展させてきています。

森林を基盤として、若い人たちがつながりをつくり、地域で新しい活動を展開する動きは、全国各地で進んでおり、本号で紹介するezorockの活動もバイオマスに焦点を当てた先駆的な取り組みです。今までの伝統的な林業の枠にと

らわれない新しい発想で、新しい取り組みが展開されており、これまでの林業のイメージを変える世界がつくられているように思います。

森づくりには長い年月が必要です。長い年月をかけて森を育てるためには、自分が変わるだけではなく、地域を変え、子どもたちに引き継いでいく必要があります。森づくりを通してこのことを学び、そして実践しているのが、ここで紹介した若い人たちの活動なのだと思います。✦



柿澤 宏昭  
(かきざわ ひろあき)

北海道大学  
森林政策学研究室 教授  
コープ未来の森づくり基金 運営委員長  
1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。現在、北海道大学農学部森林政策学研究室教授。持続的な森林管理を多様な人々の協働で支えるしくみづくりをテーマに研究を行っている。また、欧米、ロシアなどの森林管理政策にも詳しい。主な著作に『エコシステムマネジメント』（築地書館）。2008年より「コープ未来の森づくり基金」運営委員長を務める。



# PROJECT NINOMIYA

北海道を「<sup>rockする</sup>揺り動かす」。若者たちが集まってボランティアでの環境活動をベースに北海道を、社会を揺り動かす、変えていこうとezorockが生まれたのが2001年のこと。音楽フェスの環境対策をはじめとして様々なプロジェクトが生まれ、これからの新しい社会の形を模索して活動の幅を広げています。

そのひとつが今回ご紹介するプロジェクト「NINOMIYA」。「NINOMIYA」という名前は学校の前庭の銅像でおなじみの二宮金次郎から。薪を作り、運ぶこと、そして学ぶこと。その二つの意味が込められた名前なのです。

このプロジェクト「NINOMIYA」が行っているのは、一言でいえば薪の製造と販売。大学生のボランティアをはじめとする若者たちがコツコツと割った薪を、札幌を中心とする飲食店などに販売しているのですが、もちろん、ただの薪屋さんというわけではありません。

林業の現場で出る、木材として使えない部分を「運び出す」ことから始まり、石狩の活動拠点に集積して、これを「薪割り」する。割った薪は集積してコンテナで「出荷」。これらの作業のほとんどは人力で行うことができる。これがひとつの特徴です。また、一般的な薪販売のように一山ではなく、コ

ンテナで売っているために購入先での保管も簡単。このように、都市部の暮らしに合わせた販売方法も特徴なのです。

さて、このプロジェクトの活動に参加する多くは20代～30代を中心とした青年層のボランティアです。それでは「若い労働力の使い捨てじゃないか」なんて声が聞こえてきそうですが、そうではありません。

札幌市内を中心に、薪の販売は増えているところですが、その収益は若者たちの学びのために使われているのです。具体的には、森に触れ、学ぶためのツアーや、北海道や自分の未来について考えるためのイベントなどに使わ

れ、将来を考える若者たちのために還元されています。それが名前の所以でもあるのです。このプロジェクトには、毎年のべ700名以上が参加し、割る薪は年間100m<sup>2</sup>に上ります。ちなみに初心者ほとんどですが、けが人は0名。安全管理にも気を使っています。

熱源として薪の使用を促進することはもちろん、森林の未利用資源を原料としたり、多くの作業を人力で行うなど、森から北海道の未来を創る環境プロジェクトでありながら、その本質は、未来を育てる「人」を創るプロジェクトでもある。そんな魅力ある活動についてご紹介します。

🌿 NPO法人 ezorock 📍札幌市中央区南9条西3丁目1-7 🌐 <http://www.ezorock.org/>





# PROJECT NINOMIYA

未来のことを考えるなら  
エネルギー問題は避けて通れない。

薪の原材料になる木は主に石狩の山林や、公園・街路で伐採されたもの。木材にならない根元や先端の部分が使われます。これを運んで薪を作り、コンテナに詰めて配達する。ここまでを人の手で行うのがプロジェクト「NINOMIYA」の主な活動です。

ではなぜ薪売りなのか。NPO法人 ezorockでは、北海道の未来を考えるにあたって以前からエネルギー問題に取り組みたいと考えていました。しかし発電に関わるにはハードルが高い。そこで、熱源として一から十まで人の手で行える薪なら、多くの人に参画してもらいながら、事業を作れると考えたのだそう。

若者たちの未来に選択肢をプラス。

そしてこの活動の主人公となっているのが、大学生をはじめとする若者たち。NPO法人 ezorockの活動は主に若者向けのものです。しかし、森の活動に巻き込みたいと考えるには理由があ

りました。「針葉樹と広葉樹の違いも分からない人が多いですよ」と話すのは、このプロジェクトのコーディネーターを務める大熊啓介さん。中学で習うはずのことすら頭に残っていない。それほど人と森との距離が離れていることに驚いたといいます。だから、「森に生えている一本一本の木には種類があって、違う役割があって、そうして初めて森が成り立つということを知ってほしい」と話します。

大熊さんはこうも話します。多くの学生さんは、卒業すればどこかの企業に就職するか、公務員になるかして社会に入って生きていくのが当たり前だと思っている。でも、その社会に順応できずに苦しむ人だっているのです。一本一本の木が別々の役割を持ってひとつの森を形作るように、きっと一人一人の人間が違う形で社会に関わっていたっていいのです。そしてその気づきが、若者たちの未来の選択肢を広げることにつながります。だから、「体を使って働く方が合っているというという人に、林業などの一次産業で働くという選択肢を考えてもらう機会になると

思っています」と話します。

一次産業が  
北海道を支えているはず。

多くの若者たちがこのプロジェクトに参加してきました。そして、森から学んだことを仕事に生かそうと就職先を決めた人も何人か出てきたのだとか。

こうした成果が少しずつ生まれ始めているこのプロジェクト。そこから垣間見える北海道の未来もあります。

「北海道の一番大きな産業は一次産業です。それを若い世代が担っていかなければならない」と話す背景は、北海道の林業をはじめとする一次産業への危機感です。

大学を卒業すれば、就職するのは一般的な企業。つまり、ホワイトカラーで働く、ということが普通の考えになっている今、一次産業に関わる仕事に就く人は減っています。一方で、現場の仕事を知ることで、逆にそれがカッコイイと思う人も出てくるのではないかと考えているとのこと。薪割りという、やっつけて単純に気持ちよくて楽しい活動を取り入れていることも、森で働くイ

若者たちが関わることで、北海道と森づくりの未来が変わる。  
次の世代まで見据えて活動する「薪割り」とはどんなものだろう。

メージを変えていくことに一役買っているのでしょう。

ただ、イメージだけでは片手落ちで、現場の人と触れ合って生産についてもよく学ぶ、ということを大切にしていると大熊さんは言います。「生産の部分は現場に行ってきたと知る、ということがあります。『自分たちで生産したものを加工して販売する』という流れを知っていれば、農業だろうが漁業だろうがきちんと六次産業化できるところを目指して今はやっているんです」と、この活動で得た体験が、きちんと次につながっていくように考えているのです。大熊さん自身が、音楽フェスで出た生ゴミを堆肥化して作物を育てるプロジェクトを手がけていることもあり、一次産業に人が流れていく仕組みができたらいという思いがずっとあったのだそう。

木が身近にある、ということをも  
世代を超えて。

この活動が北海道の森の未来を創っていくイメージのもうひとつは、若い人たちが今、森や森の仕事に触れること

で、次の世代が森と関わるための素地をつくること。あすもりでコープの森づくりやワークショップにも参加している大熊さんは、「特にあすもりに関わってから、親が自分の子どもに森の教育ができるようにしていけないか、と思うようになりました。今の若者たちは『森は危ないから近づくな』と言われた世代。このタイミングで若者たちが木のことを考えるようになって、木を使うという選択肢を視野に入れられるようになれば、子どもたちも同じようなことができて、つながっていくと思うんです」と、植樹祭や森のイベントで親子や子どもに向けて森のことを話す若者たちが増えていけばいいと話してくれました。

消費者を育てることも  
大切な森づくりではないか。

「自分の中では、木を購入することが森づくりにつながっていくと考えています」と話すのは、これからの自分たちの森づくりについて。

薪を買って、それが森づくりにも役立っていく。それが自分たちの仕組みづくり。こういったことをたくさん生み出

していけば、森にお金が行く仕組みができてゆくのではないか。それには木を使う人を生み出すことも大切。「森づくりでは、森のことを考えますけど、自分たちは消費者のことを考えたいと思っています」と、木を使う流れをつくることの大切さを深く考えています。「石狩の木のものを買いたい、と思っても買うものがない。だから自分たちで作っていきたくて、それを札幌や石狩で消費してもらえよう、地産地消の流れをつくっていきたくて」。そうして、森と人をめぐる環をつくらうとするのが、プロジェクト「NINOMIYA」なのです。

このプロジェクトには、森に縁もゆかりもなかった若者たちがたくさん参加し、薪づくりを通して山と街と人に触れ、森を学んでいます。そこから生まれてくるものはきっと世代を超えて森に関わる人を生み出す、未来の森づくりです。若者たちが主人公となり、森を通して未来を見通した時、彼らは森と人を新しい絆でつなぐ力を手に入れているに違いありません。そしてそれはきっと北海道を揺り動かすような、大きな力になるはずなのです。 ♣



薪の搬送コストのことなど、課題はありますが、薪割りは健康増進にも有用といわれていて、今後はいろんな方向に展開できる可能性があると思っています。個人と事業が共に成長するプロジェクトに育ってほしいですね。



NPO法人 ezorock代表  
草野竹史さん



## さくらの咲くところ 家具工房

家の中の家具や木のお皿、子どもの積み木は全て北海道の木で作られています。形はシンプルながら居心地のよい家にフィットするような飽きのこないデザインばかり。暮らしの中のあちこちに「木のもの」があふれている。そんな風に、木に包まれたようなお家で話を聞いたのは、木工作家の吉澤俊輔さん。普段過ごしている居間にご家族で迎えてくれました。

島牧村出身の吉澤さんは、父親の影響もあってものづくりが以前から好きだったそうです。自然な流れで、家で必要なものは自分で作るようになりました。小物から家具まで、独学で作っていましたが、二十代の半ばに岐阜県の木工会社に働きながら技術を確かめ、島牧に戻ってきました。

ここでやっているものづくりは、北海道の木のみを使っている、というだけではなく、接合のための接着剤には ニボ 膠を、木の表面には自家栽培のエゴマから絞った油と島牧村の養蜂家から提供された蜜蝋を使っているというこだわりよう。「子どもが触るものだから、というだけではなく、土にちゃんと還るものを使いたいと思っています」と、その思いを語ります。「本当は木も島牧で伐った木を使いたい。島牧で生まれて島牧の土に還るものにしたいんです。森ってそういうものですよ。でもそこまではまだできていません。ゆくゆくは島牧に生まれたものだけで作ってきたい」。こう話す吉澤さんの思いは、実は吉澤さんのライフスタイルそのものなのです。

「昔は近くの木を伐って必要なものを作るって当たり前だったでしょう」。外国産の木が入ってきたのは経済だけの論理。だから、暮らしに必要なものをなるべく身近な範囲で調達するし、



暮らしの中に「なじむ」家具や食器、シンプルな積み木。薪ストーブは、部屋を暖めるだけではなく、塩やメープルシロップづくりにも。そんな自然とつながりのある暮らしを实践・提案する吉澤さんご家族。

作れるものは自分で作って生活する。木工も、家具から食器などの小さなものまで手がけるのはそういう理由があります。

木工だけではなくありません。薪ストーブの上では塩とメープルシロップを作るために、島牧の海の水とイタヤカエデの樹液が煮詰められていますし、ストーブの横の大きな木箱では味噌づくりに使う麹が育っています。さらには、「仲間と米も作っていますし、ブナの森を歩くエコツアーもやります。この麹はワークショップでみんなで仕込みました」と、そのライフスタイルを自分だけではなく、周りの人とも分かち合うのだと言います。

「私たちの暮らしの原点は自然とつながっています。頭で分かっているかもしれないけど、それを五感で感じてほしい。大地、空、海とつながっているということ、言葉ではなく、実感してほしいんです」。吉澤さんにとって自然をベースにしたライフスタイルの実践やワークショップによるシェアは、自然とつながっている暮らし方の提案であり、木工はその一部分なのです。

そして、吉澤さんには思いの共通する仲間もおり、その人たちと島牧の森を活用していく活動も始めているのだそう。「森を管理しながら、必要なものを森からいただく。昔は当たり前」だった森と人との循環を、今の時代に合ったやり方で行っていきたくと考えています。僕は木を使う方で(笑)」と、暮らしと人が結びついた森づくりを始めていきたいとのこと。

森と木と自然を中心にしたものづくり・暮らしづくりを实践する吉澤さん。これからどんな森づくりが始まって、木工や生活がどう広がっていくのか、とても楽しみです。✿

# 大きな木の小さな物語

## ⑧ ナナカマド

「ナナカマドって燃えにくいんですか？」  
たびたび訊かれます。ナナカマドは七回かまどで焼いても燃えにくい、これが和名の語源だという説があることから、燃えにくい木、という印象があるようです。しかし、十分乾燥させた条件でほかの樹種と比べると、多少火持ちがよい、燃え尽きにくいというはあるけれど、火が着きにくいということはないそうです。

ナナカマドは全道に分布する落葉広葉樹で、高さは10～15mほどになります。

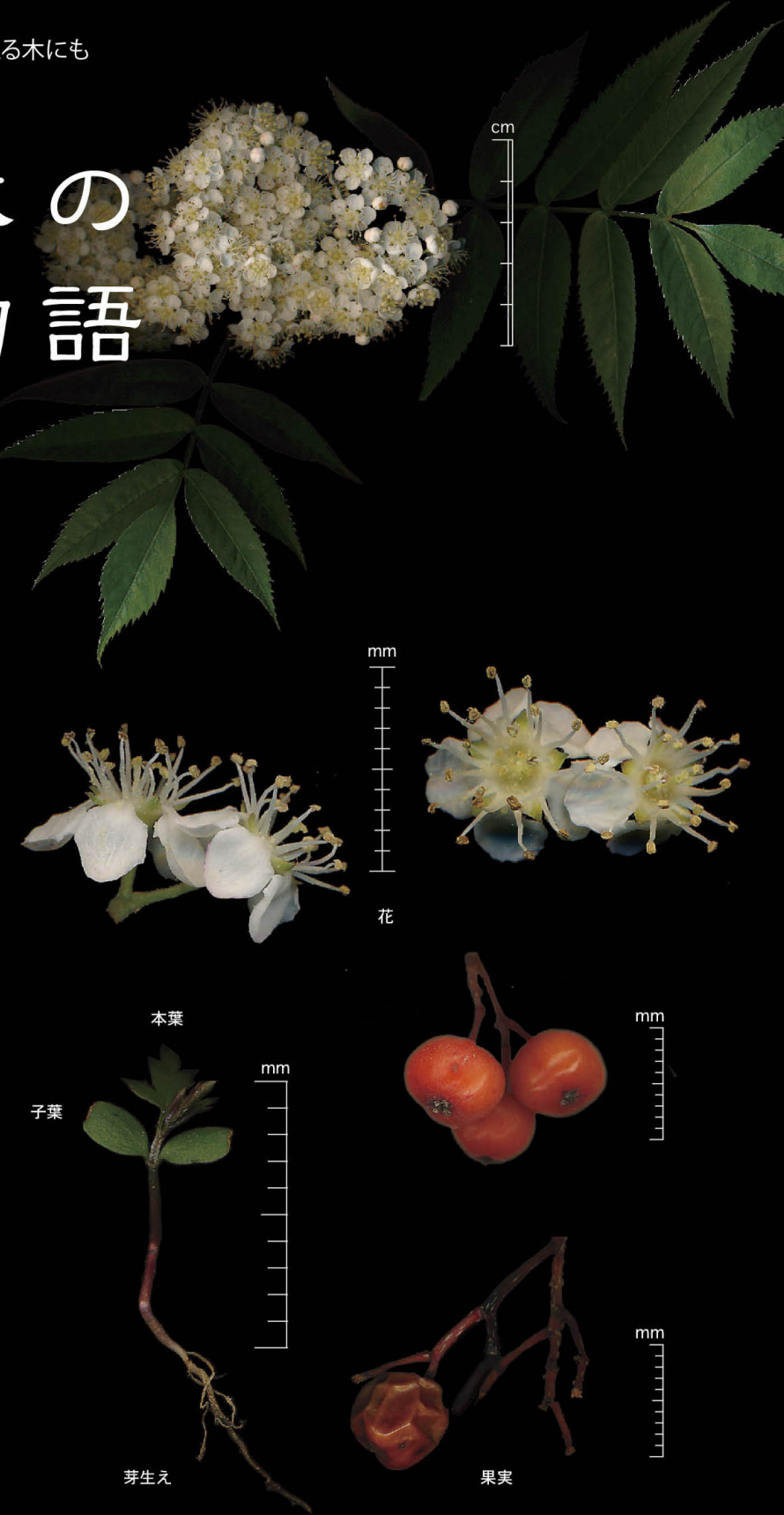
札幌市の街路樹では最も植栽本数が多い樹種です。「市町村の木」と指定している自治体も道内には34市町村あります。

とても身近な樹木ですが、森の中で頻繁にお目にかかることはありません。果実を食べた鳥たちが飛んでいって、糞として一緒に落ちたタネが芽をだす、という増え方をするので、まとまって生えることはないからです。それと森の中では、上から2番目の梢の層までしか高さが達しません。最後はより高い木に邪魔されて、光が十分に当たらなくなって枯れてしまうので、大木を見かけることはありません。

札幌では5月の末に花が咲きます。ある日、友人から電話が入って「ねえ、カリフラワーみたいな白い花が咲いている木は、なあに?」。しばらく考えてから「あっ! ナナカマド」と答えると、「いつも赤い実の印象しかなかったから、わからなかった」。確かに、ナナカマドというと赤い実にばかり目がいきますよね。

その果実、街路樹などではたわわに実ります。おいしそうに見えたので、一度味見をしたことがあります。残念ながら苦みと渋みが強くて、「まずい」です。萎びてきたらちょっとは甘みが増すかも、という淡い期待をして食べてみましたが、結果は同じ。仲間のヨーロッパナナカマドは、これとは違ってジャムや果実酒の原料になるのですが…。

3月末、もうナナカマドの実はなくなくなっているでしょう。人間の味覚では「まずい」実でも、鳥たちには貴重な冬の食糧になったのです。✿



text/images 孫田 敏  
'54年山形県長井市生まれ。'77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。'90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士(建設部門・建設環境)。'00年から北の里山の会代表。著書:アトリウムと植生(積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計:絵内正道編著)、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方(水辺域管理—その理論・技術と実践—:砂防学会編)、森林管理と市民参加(北のランドスケープ 保全と創造:浅川昭一郎編著) WEBサイト「Scan Botanica」<http://scanbotanica00.sblo.jp>





木のキモイキレイ  
のぞいてみたら何かがいるよ。  
ちょっとキモくない？  
よく見るとおもしろい！  
さがしてみよう、木のいきもの。  
ほら、いのちのふしぎにあふれてる。

# カメムシの世界

いろいろな種類がいるよ

カメムシは世界中にたくさんの種類がいる昆虫のグループ。日本には約1200種、そのうち北海道には約430種ものカメムシがいます。日本で見られる野鳥が320種なので、とても多いことがわかります。亀に似ているから亀虫と呼ばれているけれど、その姿は多彩。形も色も模様もいろいろです。

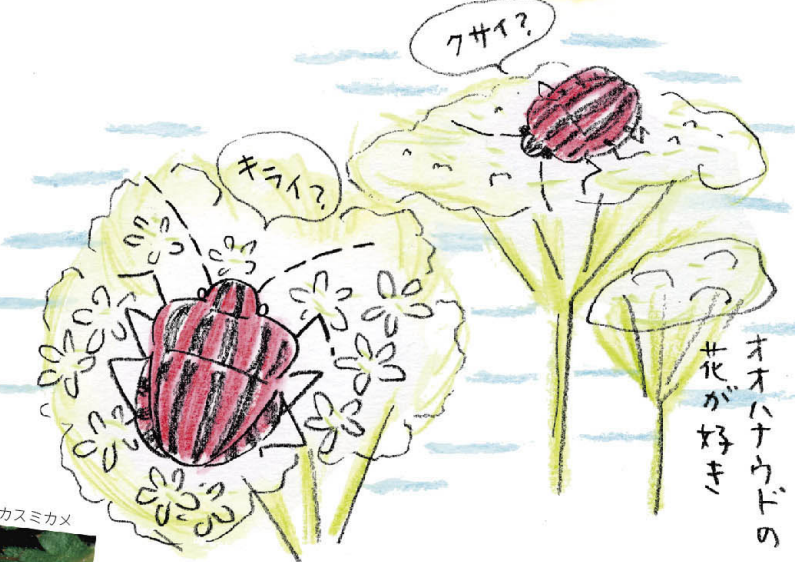


どうして家に入ってくるの？

ほとんどのカメムシが成虫になって冬を越します。そのうち一部の種類（スコットカメムシ、クサギカメムシなど）が暖かい家の中に入ってくる習性があります。日当たりの良い白い壁を好んで集まり、壁から窓や煙突を通じて入ります。



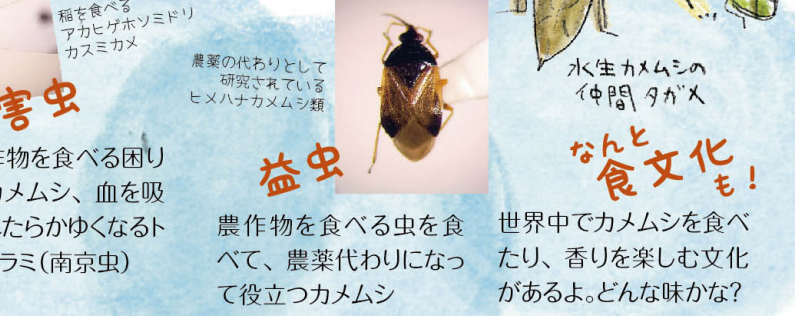
身近な場所で見かけるカメムシ。「くさい虫」「家に入ってきて嫌な虫」彼らのこと、そんな風に思っていないかな。でもね。カメムシのことをちゃんと知ると上手に付き合えるようになるかもしれないよ？



どこに  
いるのかな？



いやな害虫？ 役立つ益虫？ 人とカメムシの関係は？



ニオイで情報を伝えるよ  
「キケンだ〜」「集まれ〜」と仲間とコミュニケーションしています。

あのニオイのヒミツは？

自分を守る武器として  
「へこき虫」なんて別名があるほどのニオイで身を守ります。特にアリが嫌がります。

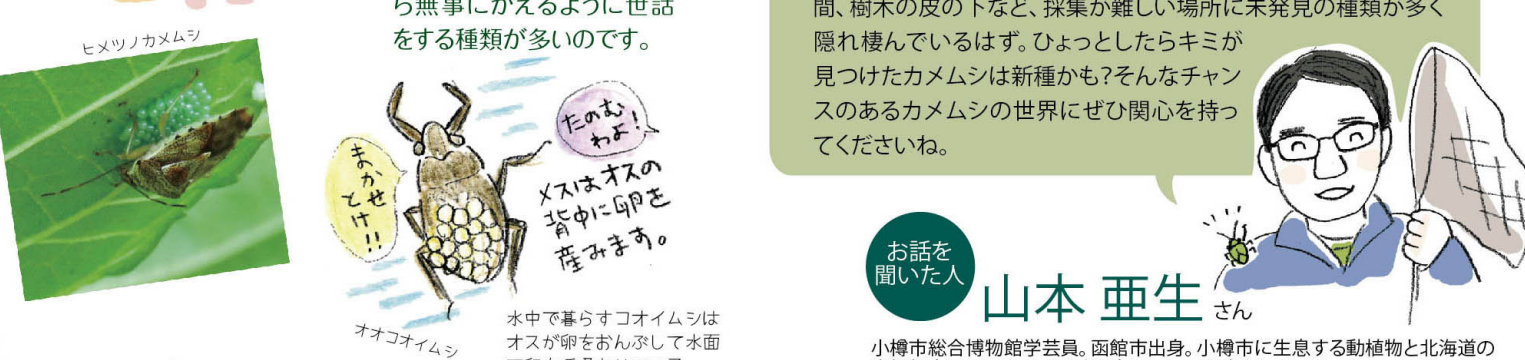


食の好みはいろいろです  
多くのカメムシは植物の汁を吸います。他の虫を捕らえて食べるものも少なくありません。



子育てをするカメムシもいる  
昆虫の中はめずらしい！！

意外かな？カメムシは卵から無事にかえるように世話をする種類が多いのです。



お話を聞いた人 **山本 亜生** さん  
小樽市総合博物館学芸員。函館市出身。小樽市に生息する動植物と北海道の半翅類(カメムシ・セミの仲間)について調査をしている。

新田薫/エトブン社  
北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかける。クモはちょっとコワイ。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。  
ブログ <http://etobunshainyazo.blogspot.com/>

宮本尚/きたネット  
森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。最近はキノコのトリコです。北海道の森の歌を作りたいと思いつつ、なかなか時間がとれないのが悩みのタネ。今年こそ！  
森づくりナビ★北海道 <http://kitanet-mori.com>



## 白樺を焚きながら、春を待つ。

2016年の北海道は、8月に大きな台風が上陸し大災害をもたらしました。その後、観測史上かつてない早い冬。雪が降ってから木々が紅葉し、雪が積もってから銀杏が落ち、長い冬となりました。被害を受けた方々には、本当に厳しい冬だったのではないかと思います。もうすぐ来る春がみなさまに恵みの季節となりますように。

私はこの冬もペレットストーブの炎を眺めて過ごしました。このストーブのことは以前にも書いたことがありますね。東日本大震災3.11の後、「森林・林業日本の町」を目指す岩手県の住田町では、地域の材を使った、木のぬくもりのある仮設住宅を建てました。地域のペレットを使って、暖かい暮らしをしてもらいたいということで、仮設住宅でも使える小型のペレットストーブを開発しました。

それが「MT-311SUMITA」というストーブの原型です※。震災から6年、私とストーブの付き合いは5年になりました。

このストーブは自動点火ではありません。毎朝、「今日も寒いなあ」とつぶやきながら、前日の灰を捨て、前面のガラスを拭き、焚き付けを入れて、昔ながらの、桃や象の絵のマッチで火をつけます。面倒ですが、火の力を実感する小さな儀式のような時間です。

焚き付けには、最初の頃は、使用済みの割り箸、松ぼっくりや枯れ枝などを使っていました。一昨年から、森の整備や薪

※「MT-311SUMITA」はより省エネにモデルチェンジされ、現在は「RS-min」の商品名で販売されています。

づくりをしている方から、白樺の樹皮「雁皮(ガンビ)」を分けてもらって使っています。冬の初めに、ダンボールひとつ分届けてもらった雁皮を、ペレットストーブの燃焼枠に合わせて、ハサミでチョキチョキ、10センチくらいの大きさにします。切った後は、雨風に当たらないように袋に入れてベランダに出します(暖かい室内においておくと、ニョロニョロなどいろんなものが誕生する可能性がある…。)それを少しずつ使って冬を越します。

白樺は人に優しい樹、樹皮は清潔で、素手で扱っても棘もなく、よく乾いているとパキッと折れてハサミがいらなくらい。触った手がきれいになる気がする清々しさがあります。美しい樹皮の手触りに、子どもの頃の森の思い出、薪ストーブやたき火の記憶が蘇ります。

この白樺の焚き付けを写真入りでインターネットに載せたら、九州在住の友人から「白樺って憧れるなあ、触ってみたい」というコメントが。白樺は北国の樹、寒い国に温もりをくれる樹だなあ、と改めてそのありがたさを思いました。

長かった今年の冬ももうすぐおしまい。イタヤカエデの樹液をとってメープルシロップを作ったり、白樺の樹液のコーヒーを楽しんだりする季節です。スプリングエフェメラル(春の妖精)と呼ばれる花々が森に溢れる季節がそこまできます。★

みやもと なお

認定NPO法人北海道市民環境ネットワーク「きたネット」常務理事

オホーツク出身、東京での生活を経て、札幌市在住。コピーライター、心身障害児(者)の介護・マネジメントなどを経て、現在はきたネット理事のほか、「北海道エネルギーチェンジ100ネットワーク」代表、シンガー・ソングライター。

Event Report

考えていこう。人と動物と森のいい関係!

## 円山動物園でどんぐりプロジェクトスタート

円山動物園で未来の森をつくらう! コープ未来の森づくり基金と札幌市円山動物園がコラボした森づくりがはじまりました! このプロジェクトは森づくりだけでなく、森と動物、森と人がどんなふうにつながっているのかを学ぶ環境教育プログラムでもあります。

第一回は2016年の9月22日。10名の子どもたちが集まり、動物園内でどんぐりを集めました。これをエゾシカとヒグマが食べるところを見て、森の木々が動物たちにとって大切な食べ物だということを改めて確認。残ったどんぐりは苗畑に植えて、植樹のための苗にします。エゾマツの植樹や春に野の花が咲く花壇もつくりました。

自分たちが植えた木々やどんぐりがどのように森になって動物や人とのつながりが生まれていくのか、これから子どもたちと一緒に学んでいきましょう!

どんぐりたくさん拾ったよ

シカさんもどんぐり大好きなの?

マジか。ヒグマもどんぐり食べるのかー。

拾ったどんぐり、大きく育てよ!

エゾマツ植えたよ。リスさん、来るかな?

Event Report

植えるだけじゃ森づくりっていけないから、育てる方もやろう!

## 第2回 コープの森育樹祭

木が育つには植えるだけじゃだめ。雪や風や動物やそのほかの植物や…。野山にはライバルがいっぱいいます。だから苗木がある程度育つまでは人のお手伝いが必要なのです。それをやってこそ森づくり。

コープの森育樹祭第2回目となった2016年9月10日は、はじめこそ天気がいまいちだったものの、いざ動き出すと青空が顔を見せてくれて、活動するにはもってこいのお天気に。今回も植樹した木を日陰にしてしまう、背の高い草を中心に除去しました。ススキやキクイモ、イヌタデ。そしてやっぱり手強いのがオオイトドリ。地上部よりも大きな根っこを、いくつも掘り返しました。草取りだけじゃやった後はほんとうにすっきり。みなさん楽しそうな顔が印象的です。木の苗たちもすっきりして春を迎えられますね。参加した皆さんの気持ちを受けて無事に大きく育てほしいものです。

草、抜いたらこんなにあっさりしたさ!

え?草抜くの、楽しいよ。すっきりするから。



BEFORE (人間のかって、すごいなあ。) AFTER



Event Report

学ぼう森の最新事情。
話そう未来の森のこと。

第7回 北海道の森づくり交流会

7回目を迎えた北海道の森づくり交流会には、今回も北海道内から団体や個人で森づくりに関わるたくさんの方々が集まりました。

今年の特別講演は、先進的な林業を行うことで高い評価を受けている林業家、速水林業株式会社の速水亨さん。世界最古の木のお話から世界の森林面積の変遷、日本の林業の衰退、伐るべき木や伐ってはいけない木の話など、グローバルからローカルまで視野の広いお話を伺いました。

そのほか、各地区での森づくり活動や、ボルネオで環境を学ぶツアーの報告を聞き、参加者との交流を深めて今年も森づくりを通じたつながりを深めた1日となりました。

わたしにとっての森の魅力はね...



特別講演の速水亨さん (速水林業株式会社)

どんな活動してるんですか？



今回はお食分つきだから、交流もはずみでした！

お弁当、おいしいね！



Event Report

どんな森をつくる？ 市民による市民のための森づくり計画、進んでいます。

Fの森 ワークショップ

2016年も行われた森づくりワークショップ。新しいメンバーを交えながらも、みなさんはだいぶ慣れてきて、Fの森はだんだん自分の庭のようになってきました。

フィールドワークを重ねながら、来年度の植樹地とその樹種も決まりました。どんな森にしていこうかを考えるといつもみなさんわくわくします。

2017年度の植樹計画！



樹木調査だよ。植えた木は順調に育ってるかな？



来年はどこを植樹地にしたらいいかな？ いろんな森にしたらいいかな？

Sponsors

2016年度 コープ未来の森づくり基金 ご協賛を頂いた企業・団体様

- List of 100+ companies and organizations that sponsored the 2016 Forest Future Foundation event, including various regional and national businesses.

協賛企業に聞いてみた。 応援しています コープの森づくり #11

マルハニチロ株式会社

マルハニチロといえば缶詰や冷凍食品のイメージが強いかもしれませんが、水産業が大きな割合を占めています。

水産会社だから海や川の水のもととなっている森には関心を持っています。近年漁業資源が減少してきている森には関心を持っています。

また、北海道産の原料で作った食品などもありますので、そういったもので協賛商品を展開し、あすりの森づくりにより協力していけるのではないかと企画を考えています。

これからも北海道の豊かな漁業資源を食卓にお届けしていきたいという気持ちも込めて、あすりの活動も応援したいと思えます。



マルハニチロ株式会社 北海道支社 小川原 真さん

Present アンケート&プレゼント

「モリイクvol.13」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1: モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
Q2: 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか？
Q3: 森づくりの活動に参加したことがありますか？
Q4: コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
Q5: 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。



PRESENT! アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に、「さくらの咲くところ家具工房」よりサクラ材の皿(92mm径)をプレゼントします！

応募方法

アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。

コープさっぽろ基金事務局 〒063-8501 札幌市西区寒夏11条5丁目10番1号

